

青森県内における 奈良・平安時代の鉢（浅鉢）形土器について

新山 隆男（青森県埋蔵文化財調査センター）

1 はじめに

青森県内において古代の堅穴住居跡などから出土する、壺をやや大きくしたような鉢（浅鉢）形土器を目にすることがある。筆者は八戸市櫛引遺跡の資料を整理していたときにこの資料を扱ったが、その資料は奈良時代のものであった。その後、平安時代の資料を整理していた時に、類似した資料を目にしたことで、鉢（浅鉢）形土器の使用される期間がこれほどまでに長期間にわたるのか疑問に思い詳細に調べてみたくなった。本稿では、青森県内における奈良・平安時代の鉢（浅鉢）形土器の分類、集成等からその成果をまとめ、時期・年代、使用目的等の考察を行うこととする。

2 取り扱う資料

本稿では、基本的に以下の条件に見合うものを「鉢（浅鉢）形土器」とした。

- ・酸化焰焼成、土師質無高台、サラダボール状を呈する器形のもの（註1）
- ・口径18cm以上、30cm未満のもの（註2）
- ・器高指数35以上とのもの（註3）

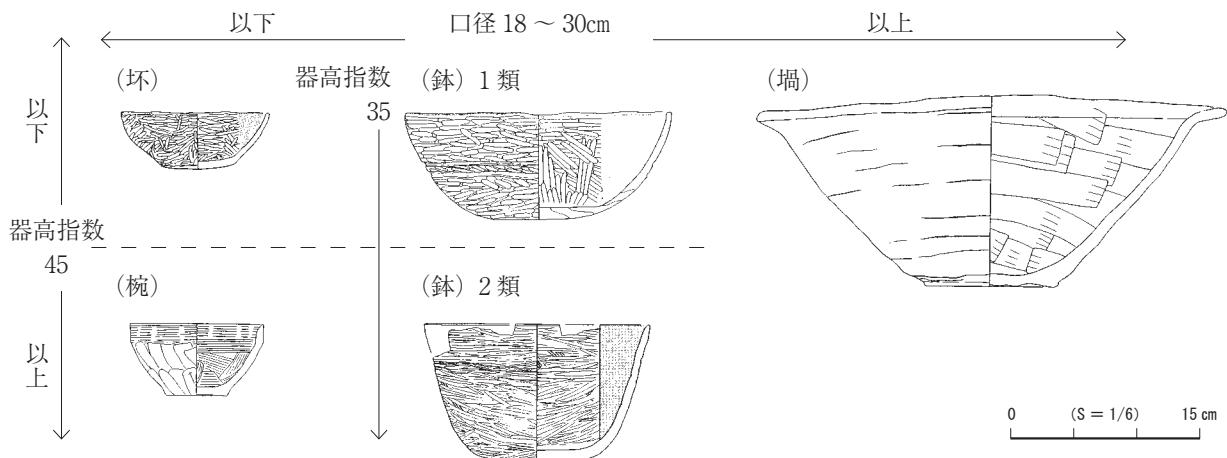


図1 鉢（浅鉢）形土器

以上の条件に見合う完形品・略完形品、もしくは口縁部から底部まで残存する資料のみを扱った。報告書によつては、壺・椀などと器種分類しているものもあるが、上記の条件を満たすものは今回取り扱う資料に含めた。なお、全ての資料を実見できたわけではなく、実測図・観察表のみでしか判断できなかつた資料もある。

3 分類

青森県内における13の遺跡から出土した、前述の条件を基本的に満たす19点の資料を取り扱う。分類は「成形」と「器高指数」をもとに行い、それぞれの組み合わせによって細分した。

（成形） A類：非口クロ成形1（ミガキ調整）

B類：非口クロ成形2（ミガキ以外の調整）

C類：口クロ成形

（器高指数） 1類：壺形タイプ（指数35～45）

2類：椀形タイプ（指数45以上）

組み合わせた分類における資料数は以下の通りである。

A1類（非口クロ成形1の壺形）：8点

A2類（非口クロ成形1の椀形）：6点

B1類（非口クロ成形2の壺形）：0点

B2類（非口クロ成形2の椀形）：1点

C1類（口クロ成形の壺形）：3点

C2類（口クロ成形の椀形）：1点

器高指数で「壺形」と「椀形」に分類した

理由であるが、前号の「研究紀要第16号」でも引用した、岩井浩人氏（岩井：2008）の土師器壺の分類を参考にした。岩井氏は器高指数35以上を「壺A」、27～35を「壺B」と分類している。また、同じく前号で筆者が設定した器高指数45以上を「椀」（新山：2011）とした分類を今回も踏襲して上記のような分類基準とした。

次に、器高指数のグラフ（図2）を元にそれぞれの分類の特徴を見ていく。まず、器高指数45ラインより下に位置するのが1類、上に位置するのが2類ということになる。数量的には1類が11点、2類が8点ということではほど差はない。2類の中で飛びぬけて器高が高い資料が2点（図3-15・19）あるが、これは特殊な器形・器面調整の特徴をもつものであり、後ほど詳細を記述する。1類で最も器高が低い資料（図3-16）は、器高指数35になるものである。また、A・B・C類を比較して見ると、A類は器高が8～11cm代に収まるのに対し、B・C類は6～14cm代とばらつきがあることがわかる。口径で見てみると、A2類は20cm前後に集中しているが、A1・B・C類は18～27cm代と広範囲にわたることがわかる。

なお、資料における計測値・指標等の基礎データは文末の観察表にまとめた。以下、分類に従つて、資料の詳細について記述していくこととする。

A1類（図3）

李平下安原遺跡第130号竪穴住居跡、浅瀬石遺跡第6号竪穴住居跡、中野平遺跡第5号竪穴住居跡、ふくべ(3)遺跡第10号竪穴住居跡、田面木遺跡SI-04住居跡、田面木平(1)遺跡第58号竪穴住居跡、櫛引遺跡第27号竪穴住居跡の資料が該当する。器形は、ほとんどの資料が底部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる中、田面木平(1)遺跡の資料（7）のみ口縁部直立する特徴をもつ。また同資料は内外面に明瞭な段（2段）を有し、他の資料は外面に沈線（稜）状のくびれを有する。底面形は、ふくべ(3)・田面木・田面木平(1)遺跡の資料（5・6・7）は丸底、櫛引遺跡の資料（8）が平

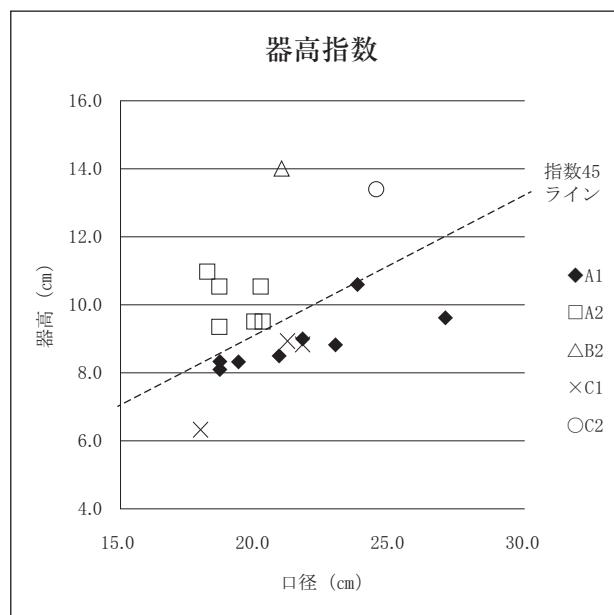


図2 器高指數

底、その他の資料は平底風の丸底を呈している。器面調整は、初期調整に若干の違いはあるものの、全ての資料が内外底面ミガキ調整を最終的に施している。また、内面黒色処理も全ての資料に施されている。なお、田面木平(1)遺跡の資料（7）には内面十字のヘラ記号が施されている。その他、共伴する遺物としては、ほとんどが土師器壊・甕であるが、中野平・田面木・田面木平(1)・櫛引遺跡の同遺構からは球胴甕が出土している。また、浅瀬石・ふくべ(3)遺跡の同遺構からは紡錘車、田面木平(1)遺跡の同遺構からは土玉・刀子が出土している。

A2類（図3）

ふくべ(3)遺跡第2号竪穴住居跡、風張(1)遺跡第4号竪穴住居跡、田面木遺跡SI-04住居跡、櫛引遺跡第3・4・50号竪穴住居跡の資料が該当する。器形は、全ての資料が底部から口縁部にかけて外傾するものであり、風張(1)・田面木・櫛引遺跡の資料（10・11・12）はやや内湾しながら直立気味に外傾する。櫛引遺跡の他の資料2点（13・14）は底径が小さく、口縁部がやや開き気味に外傾する。ふくべ(3)遺跡の資料（9）は底径が大きく直立気味に外傾する。また、ふくべ(3)・風張(1)・櫛引遺跡の資料（9・10・12・14）は外面に沈線（稜）状のくびれを有する。底面形は、風張(1)・田面木遺跡の資料（10・11）は丸底、櫛引遺跡の資料3点（12・13・14）は平底、ふくべ(3)遺跡の資料（9）は平底風の丸底である。器面調整は、内外底面または内面にミガキ調整を施す。なお内面黒色処理は櫛引遺跡の資料（13）以外、全ての資料に施されている。その他、共伴する遺物としては、土師器壊・甕が主であるが、風張(1)遺跡を除く全ての遺構から球胴甕、田面木遺跡を除く全ての遺構から紡錘車が出土している。

B2類（図3）

野木遺跡SI-70の資料（15）が該当する。器形は、底径が大きく、底部から口縁部にかけて直立気味に外傾する特徴がある。底面形は平底で、器面調整は内外面ヘラナデ調整である。なお、ヘラナデ調整を施すのは本稿資料の内、当該資料のみである。共伴する遺物としては、土師器壊・甕・壠、須恵器壊・甕破片である。土師器壊の中には、ロクロ成形であるが内面ミガキ調整・黒色処理を施すものが3点含まれる。内1点には外面に墨書が確認される。

C1類（図3）

早稲田遺跡第30号溝跡、高屋敷館遺跡A区第127号竪穴住居跡、朝日山遺跡第342号竪穴住居跡の資料が該当する（註4）。器形は、全ての資料が底部から口縁部にかけて外傾するものであり、朝日山遺跡の資料（18）は口唇部をややつまみ出すような特徴がある。底面形は、全ての資料が平底である。器面調整は、内外面ロクロ目以外の調整は施されておらず、底面は全て回転糸切り痕がつく。その他、共伴する遺物としては、土師器の壊・甕の他、すべての遺構に共通する遺物が皿である。高屋敷館遺跡の同遺構からは外面墨書き入りや灯明具と思われる皿・壊の他、全体形が復元できる須恵器大甕が出土している。

C2類（図3）

和野前山遺跡第1号竪穴住居跡の資料（19）が該当する。器形は、底部から口縁部にかけてやや内湾しながら立ち上がり、口唇部のみが大きく外反するという特徴がある。底面形は、平底であるが、低い台部を有する。なお、口唇部外反・低台付というのは本稿資料の内、当該資料のみである。器面調整は、内外面ロクロ目であるが、外面は刷毛状の工具を使った痕跡が見られる。なお内面には黒色

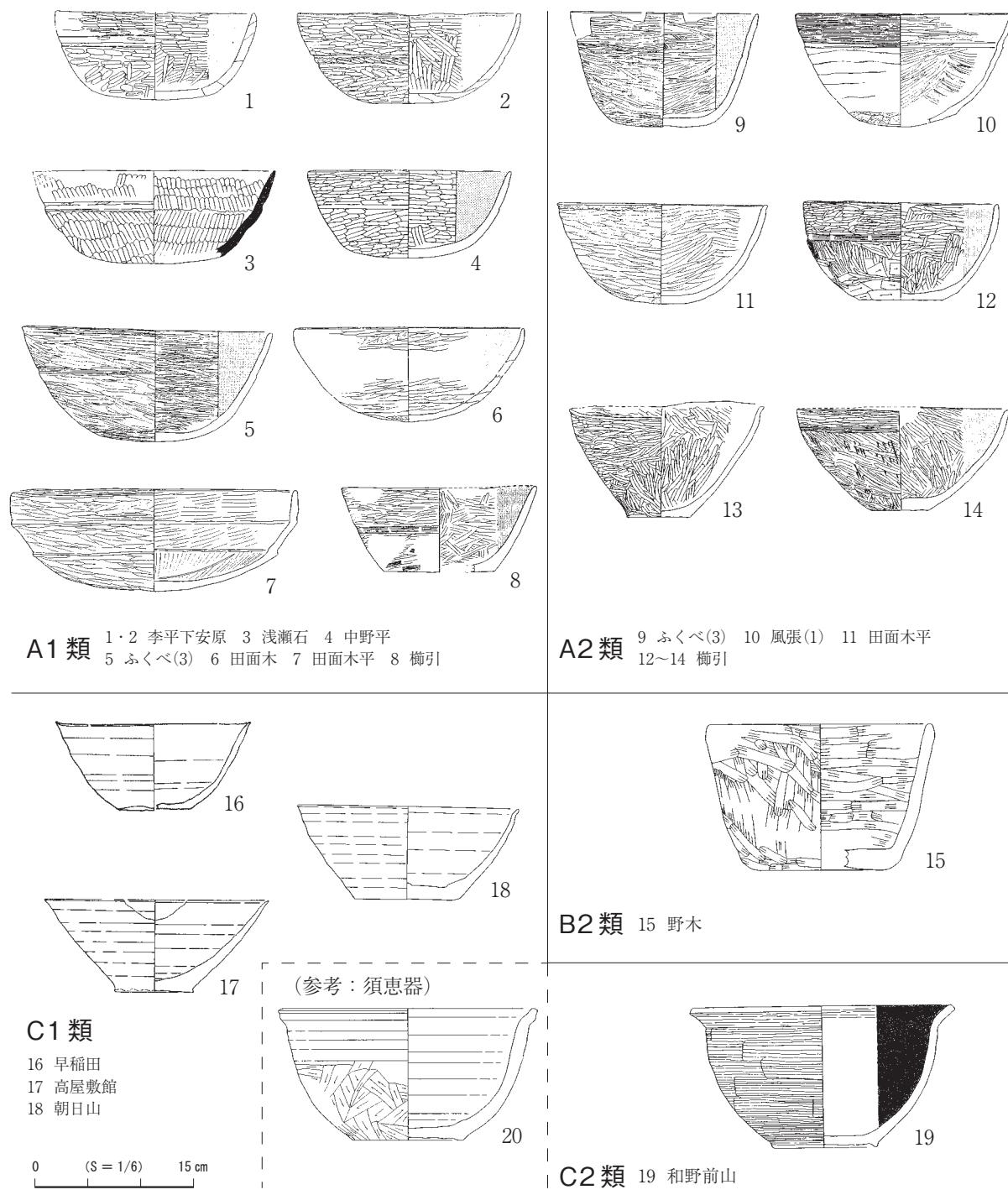


図2 鉢(浅鉢)形土器集成

処理が施されている。共伴する遺物としては、土師器壺・甕、須恵器壺・甕破片、紡錘車等である。土師器壺の中には、陶磁器の湯飲み状の形状のものもある。須恵器壺は4点出土しているが、いずれも底面窓切り状と思われる痕跡が認められる。

4 分布・時期

まず、本稿資料の分布について見ていくこととする。

本稿資料が分布する地域は、八甲田山と岩木山の中間に位置する「津軽地方」と、太平洋沿いの

「南部地方」の大きく2箇所に分かれることがわかる（図4）。いずれの遺跡も丘陵もしくは段丘上に立地しており、沖積地上に所在する遺跡はない。分類（成形）による分布で見てみると、A類は南部地方が6カ所、津軽地方が2カ所と、南部地方に偏る傾向がある。B類は南部地方のみ、C類は津軽地方のみである。

次に本稿資料の時期・年代観について考察していくこととする。

本稿資料の器形・器面調整などの特徴から大まかな時期を捉えるとすると、A類は奈良時代、B・C類は平安時代の資料ということが言える。さらに詳細な時期を捉えるとなると、本稿資料のみの特徴からでは明言できないため、遺構の帰属時期・共伴遺物・本県における古代研究の成果等に基づいて検討していくこととする。

（遺構の帰属時期）

古代における遺構の帰属時期を判断する材料として、本県では2枚の降下火山灰（十和田a火山灰、白頭山・苦小牧火山灰：註5）の有無が重要となってくる。A類において遺構堆積土中に火山灰の堆積が認められるのは、田面木遺跡第4号竪穴住居跡の1層上部のみで、他の遺構からは確認されていない。B・C類において降下火山灰が堆積しているのは朝日山遺跡第342号竪穴住居跡（C1類）、和野前山遺跡第1号竪穴住居跡（C2類）のみである。ただし、前者は2・3層にブロック状で少量含まれるのに対して、後者は2層中全体にわたって2種類の火山灰が堆積していると報告されている。

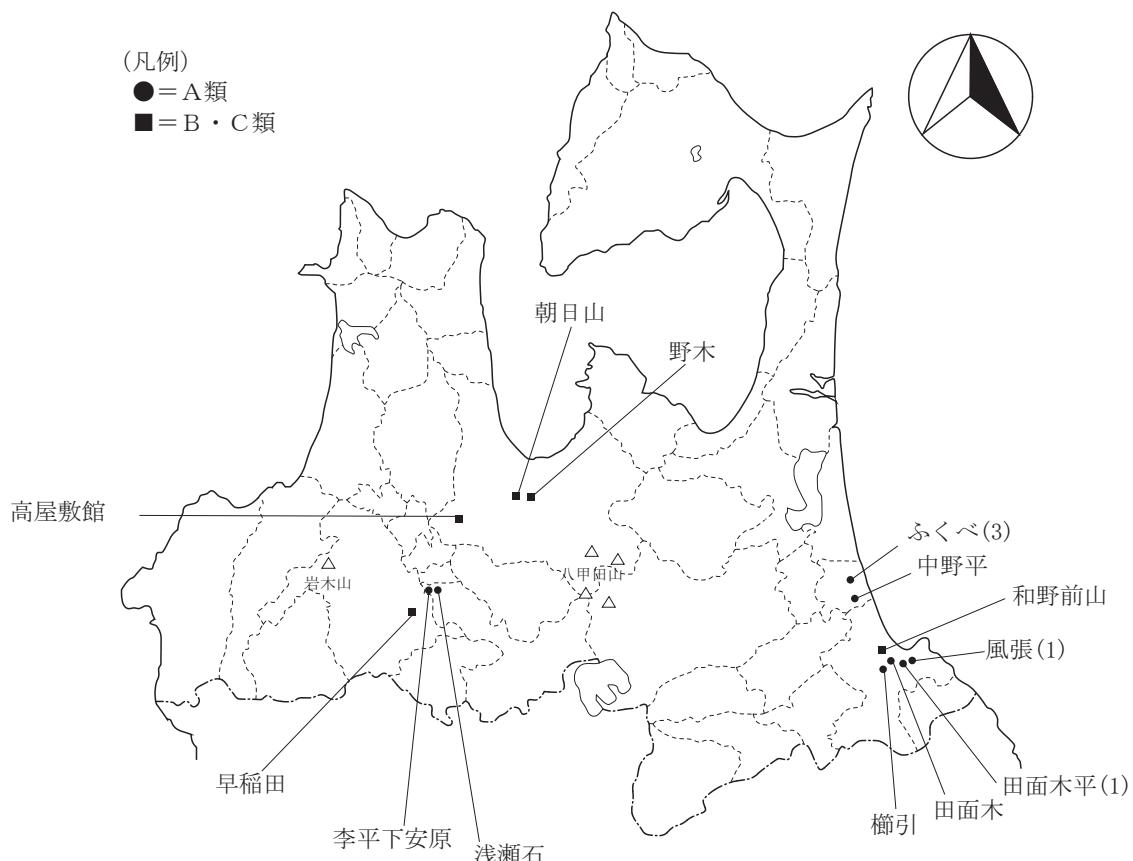


図4 遺跡の分布

他の遺構については火山灰の堆積は確認されていない。

(共伴遺物・古代研究の成果等)

まず、A類であるが、本県における奈良時代の土師器編年については南部地方（八戸地域）を中心 に宇部氏によって行われ、前1・1・2・3・4段階に細分されている（宇部：2007）。その編年に 合わせて本稿資料及び共伴遺物をもとに年代観を考察していくものとする。まずはA1類から見てい くが、田面木平(1)遺跡の資料（7）について、宇部氏は「大型壺A」に分類しており、2段階（7 世紀中葉）としている。ふくべ(3)遺跡の資料（5）は、この資料自体の編年は行われていないが、 同遺構（第10号竪穴住居跡）から出土した「椀」が3段階（7世紀後葉～8世紀前葉）であるとして いる。田面木遺跡の資料（6）も類似した特徴をもっているため同時期である可能性が高い。李平下 安原・浅瀬石・中野平遺跡の資料（1～4）は、宇部氏の編年が行われていない地域である（宇部氏 は八戸市以南を扱っている）。よって、地域差というのは当然生じてくるであろうが、八戸地域の編 年に合わせて見ていくこととする。これらの資料は、ふくべ(3)・田面木遺跡の資料が丸底を呈する のに対し、平底風の丸底を呈している。完全に平底になった櫛引遺跡の資料（8）は4段階（8世紀 中葉～後葉）となるが、それよりも古い段階となるであろう。次にA2類について見ていく。田面木 遺跡の資料（11）はA1類と同じ遺構から出土しているため3段階（7世紀後葉～8世紀前葉）と捉 え、風張(1)遺跡の資料（10）も丸底の同じような特徴をもつため同時期である可能性が高い。櫛引 遺跡の資料（12～14）であるが、13は宇部氏分類の「大型壺B」として4段階（8世紀中葉～後葉） に編年されており、同じ特徴をもつ14についても同時期である可能性が高い。12はやや壺に近い形状 であるためこれらよりも若干古くなる可能性がある。

次に、B・C類であるが、本稿資料を直接編年している例は現在のところない。よって共伴遺物の 編年が重要となってくるが、共伴遺物としては五所川原産の須恵器の有無が目安となる。五所川原産 須恵器の編年は藤原氏によって行われ、初期・前期・中期・後期Ⅰ期・後期Ⅱ期に細分されている （藤原：2007）。まずはC1類から見ていくこととする。高屋敷館遺跡の資料（17）についてだが、 同遺構からは須恵器大甕が出土している。この大甕は藤原氏編年の後期Ⅰ・Ⅱ期（10世紀中葉～第 3四半期）にあたるものと考えられる。朝日山遺跡の資料（18）と同遺構からは長頸壺（藤原氏分類 の壺Ia・b類）が2点出土しており、これらは藤原氏編年の前期（10世紀初頭～第1四半期）にあた るものと考えられる。次に共伴する土師器について目を向けてみると、C1類全ての遺構に皿が共伴 する。津軽地域における古代土器食膳具の変遷（9世紀～11世紀）をまとめた岩井氏（岩井：2008） によると、皿の使用が最も多くなるのがⅢ-2～3期（9世紀後葉～10世紀中葉）であるとしてい る。また、高屋敷館遺跡の同遺構からは壠の破片が共伴している。壠は、9世紀後葉～10世紀中頃ま でという編年（三浦：1995）や、底径が縮小するが10世紀後半頃まで見られるという編年（工藤： 2005）がある。次にB2類の野木遺跡の資料（15）が出土した同遺構からは、略完形の土師器壠2点 が共伴し皿がないという特徴をもつ。C2類の和野前山遺跡の資料（19）が出土した同遺構からは、 須恵器壺4点が共伴している。ただ、この壺は全て底面「鎧切り」の様相を呈しており搬入品の可 能性がある。また、この資料自体の形状も特徴的であり、律令的要素が反映されているものと判断され る（宇部：2010）。なお、参考資料として、五所川原須恵器窯跡群の持子沢窯跡支群のMZ1号窯から 出土した資料を掲載した。形状・法量等、19と類似する点が多い。MZ1号窯の操業時期は前期（10

世紀初頭～第1四半期）に区分されている。

以上の要素をまとめて、分類ごとの時期・年代観をまとめると以下のようになる。

A1類 = 7世紀中葉～8世紀後葉

A2類 = 7世紀後葉～8世紀後葉

C2類 = 9世紀前葉

B2類 = 10世紀前葉

C1類 = 10世紀前葉～10世紀中葉

ここで問題となってくるのが、9世紀代に編年されるのが1点のみ（C1類）で、しかも搬入品の可能性が高いものである。県内における9世紀代の考古学的資料はだいぶ揃ってきてはいるが、なぜ本稿資料が入ってこないのか触れておきたい。それは、鉢（浅鉢）形土器が全く使用されなくなるか、大型の壺を代わりに使用したという見方ができるためである。今回の設定基準を口径18cm以上としたが、9世紀代には口径16cm代の大型の壺が見られる（野尻（2）遺跡第1号住居跡など）。また、10世紀中葉～11世紀代にかけても同様の大型壺が見られる（新町野遺跡第3号堅穴住居跡・早稲田遺跡第8号住居跡・高屋敷館第74号住居跡など）。生活様式の変化や当時の食前具の使用目的なども関わってくるであろうが、この点については今後の課題としたい。

5 その他

その他として本稿資料の役割・使用目的等について若干触れておく。まず、本稿資料が壺や椀などと同じような食膳具なのか、それとも甕や壠などのような煮沸具なのかという点であるが、全ての資料を実見したわけではないが、器面に吹きこぼれと思われるような付着物等は確認されなかったことから煮炊きに利用はしていなかったようである。また、本稿資料は、住居跡1軒につき1～2個体しか出土しないようである。2個体出土したのは李平下安原遺跡第130号堅穴住居跡と田面木遺跡SI-04の2軒のみで、他の遺構からは1個体のみであった。その理由として、櫛引遺跡第3・4号堅穴住居跡出土遺物をもとに考察してみる。2軒の住居跡はいずれも焼失家屋であり、火災時には生活用品をそのままにして逃げ去ったような痕跡が見られる。残された食膳具はカマド周辺に散乱し

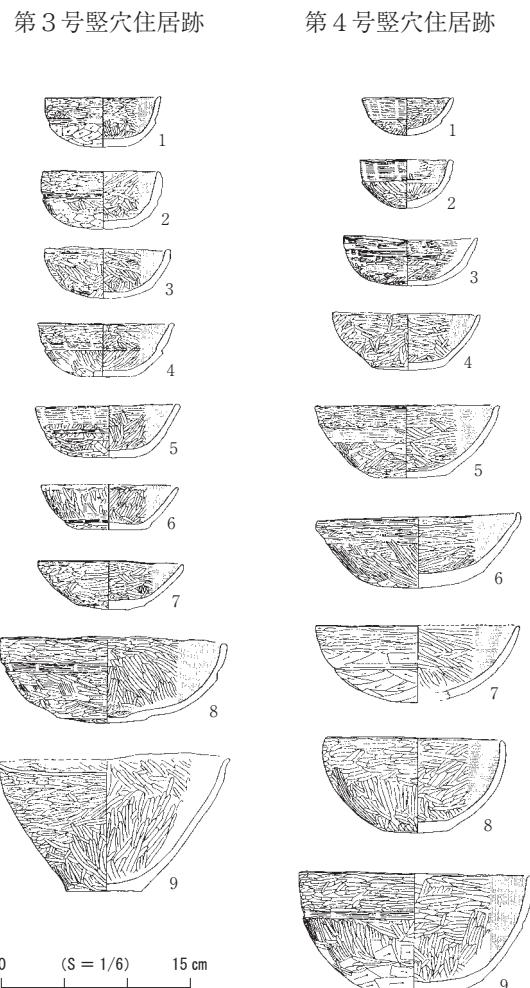


図5 櫛引遺跡出土遺物

ていたが、図5からもわかるように、2軒とも坏8点・鉢（浅鉢）1点の似たようなセット関係であることがわかる。李平下安原遺跡第130号竪穴住居跡からは鉢（浅鉢）が2点出土しているが、坏は14点出土している。坏と鉢（浅鉢）で1セットであると考えるならば、坏7点・鉢（浅鉢）1点のセットが2セットあったということになる。なお、田面木遺跡SI-04からは坏は1点しか出土していない。また、図示したのは1点のみであったが（もう1点は破片底部が欠損している破片資料）櫛引遺跡第50号竪穴住居跡からも鉢（浅鉢）形土器が2点出土していると見られ坏は14点であった。櫛引遺跡第4号竪穴住居跡出土の坏・鉢（浅鉢）のセットを重ねてみると、図6のような入れ子状になり、実にコンパクトにまとめられるということがわかる。これは、同遺跡の第3・50号竪穴住居跡出土資料においても同様の状況である。あくまでも仮定であるが、当時の食膳具は、坏と鉢（浅鉢）が1セットになって流通していた可能性が考えられるが、今回はまだ2遺跡の類例しか明らかになっていないため、今後の資料増加に期待したい。また、近県にも似たような類例がないかなど、興味は尽きないところである。

6 まとめ

本稿資料についての器形分類、分布・年代の考察等についてまとめると以下のようになる。

- ・器形は、坏形と椀形に分類され、非ロクロ成形とロクロ成形のものがある。
- ・時期・年代として、A類は奈良時代（7世紀中葉～8世紀後葉）、B・C類は平安時代（9世紀前葉～10世紀中葉）の資料であることがわかった。ただし、9世紀中葉～後葉と10世紀中葉以降は本稿資料は見られなくなるようである。
- ・分布として、A類は南部地方、B・C類は津軽地方から多く見つかっている。
- ・使用目的としては、本稿資料に吹きこぼれ等の痕跡は見られず、坏や椀と同じような「食膳具」として使用していたものと考えられる。また、奈良時代には、鉢（浅鉢）形土器1点につき、坏・椀など7～8点がセットとなる「食膳具セット」が流通していた可能性が考えられるが、類例がまだ少ない。

末筆ながら、本稿の作成にご教示・ご助言くださった方々に記して感謝の意を申し上げる次第である（五十音順・敬称略）。

浅田智晴、宇部則保、小田川哲彦、小山浩平、加藤隆則、木村淳一、佐藤（坂本）真弓、白鳥文雄、田中珠美、平山明寿、藤原弘明。

また、今年度で当センターを定年退職される成田滋彦氏に、尊敬と感謝の念を込めて本稿を贈りたいと思う。長年のご勤続、お疲れ様でした。



図6 入れ子状に重なる食膳具

青森県内における奈良・平安時代の鉢（浅鉢）形土器 観察表

番号	遺跡名	出土地點	層位	口径	器高	底径	器高指數	類型	報告書名（文献）	査図番号	刊行年	調整	底面	備考	報告書年代
1	李平下安原	第130号堅穴住居跡	覆土下	20.9	8.5	—	40.7	A1	青森県第111集	図227-1	1988	内外ミガキ	ミガキ	内黒・丸底氣味	8C後半頃
2	李平下安原	第130号堅穴住居跡	覆土	18.7	8.3	—	44.4	A1	青森県第111集	図227-1	1988	内外ミガキ	ミガキ	内黒・丸底	8C後半頃
3	浅瀬石	第6号堅穴住居跡	—	23.0	8.8	—	38.3	A1	青森県第26集	図24-4	1976	内外ミガキ	ミガキ	内黒？丸底氣味	—
4	中野平	第5号堅穴住居跡	床面	19.4	8.3	—	42.8	A1	青森県第134集	図20-1	1991	内外ミガキ	ミガキ	内黒	8C後半
5	ふくべ(3)	第10号堅穴住居跡	覆土	23.8	10.6	—	44.5	A1	青森県第392集	図42-5	2005	内外ミガキ	ミガキ	内黒・P-11	7C後半
6	田面木	SI-04住居跡	1・2層	21.8	9.0	—	41.3	A1	八戸市41集	図8-22	1991	内外ミガキ	ミガキ	内黒・丸底	8C前半
7	田面木平(1)	第58号堅穴住居跡	床面	27.1	9.6	—	35.4	A1	八戸市第34集	図18-8	1989	内外ミガキ	ミガキ	内黒・内面十字のヘラ記号	7C後葉～8C初頭
8	櫛引	第27号堅穴住居跡	1層	18.7	8.1	10.6	43.3	A1	青森県第263集	図74-7	1999	内外ミガキ	ミガキ	内黒・平底	8C中葉～後葉
9	ふくべ(3)	第2号堅穴住居跡	覆土	18.2	10.9	—	59.9	A2	青森県第392集	図14-4	2005	内外ミガキ	ミガキ	内黒(内面も黒)P-4	8C後半～9C初頭
10	風張(1)II	第46号堅穴住居跡	床面	20.2	10.5	—	52.0	A2	八戸市第42集	図84-1	1991	ヨコナデ、内ミガキ	ミガキ	内黒	8C中葉～後半
11	田面木	SI-04住居跡	床面	20.0	9.5	—	47.5	A2	八戸市第41集	図6-8	1991	内外ミガキ	ミガキ	内黒・丸底氣味	8C前半
12	櫛引	第4号堅穴住居跡	床面	18.7	9.3	7.7	50.0	A2	青森県第263集	図31-9	1999	内外ミガキ	ケスリ→ミガキ	内黒・平底	8C中葉～後葉
13	櫛引	第3号堅穴住居跡	床面	18.7	10.5	6.1	56.1	A2	青森県第263集	図27-9	1999	内外ミガキ	ケスリ→ミガキ	平底	8C中葉～後葉
14	櫛引	第50号堅穴住居跡	床面	20.3	9.5	5.1	46.8	A2	青森県第263集	図115-24	1999	内外ミガキ	ミガキ	内黒・平底	8C中葉～後葉
15	野木	SI-70	—	21.0	14.0	12.0	66.7	B2	青森市第54集-5	図671-13	2001	内外・ヘラナデ	—	—	10C前葉？
16	早稻田	第30号溝跡	床面直上	18.0	6.3	6.6	35.0	C1	弘前市	図153-18	2001	クロコ・ナデ内クロコ	回転糸切	—	10C後半
17	高屋敷館III	A区第127号堅穴住居跡	SK-04	21.8	8.8	7.8	40.4	C1	青森県第393集	図83-14	2005	内外クロコ	回転糸切	P-17	10C中葉以降
18	朝日山III	第342号堅穴住居跡	床面	21.2	8.9	10.0	42.0	C1	青森県第156集	図152-239	1994	内外クロコ	回転糸切	—	9C後半～11C代
19	和野前山	第1号堅穴住居跡	—	24.5	13.4	10.0	54.7	C2	青森県第8集	図161-10	1984	内外クロコ	—	内黒・底部低台付	9C前半
(参考:須恵器)															
20	五所川原窯跡	MZ1号窯	表採	24.6	12.3	10.4	—	—	五所川原市第25集	第4図版-56	2003	ロクロ・ケズリ内ロクロ	ケズリ	—	10C第1四半期

※口径・器高・底径の単位は「cm」である。

※計測値は、図版上で測定し直した部分もある。

※調整は筆者の判断で加筆・修正した部分もある。

※備考の「内黒」は「内面黒色処理」のことである。

註

註1：土師器鉢には「植木鉢」状のものがあるが、今回の扱う資料には含めない。なお、今回は紙面の関係上、2008年度までに報告された資料を対象とする。

註2：岩井氏が集成（岩井：2008）した「壺」の口径は8～18cmであり、三浦氏が集成（三浦：1995）した「壠」の口径はどれも30cmを越える。よって本稿においては、口径18cm未満は「壺」・「椀」と捉え、30cm以上は「壠」と捉えることとする。

註3：本稿における器高指数とは（器高÷口径）×100で示される数値である。岩井氏は壺Aの器高指数上限を35としている（岩井：2008）。

註4：2008年度以降に報告された資料の中で、C1類に含まれるものが数点出土しているため、参考資料として必要事項を下表に示しておく。

遺跡名	出土地点	層位	口径	器高	底径	器高指数	類型	報告書名（文献）	挿図番号	刊行年
新田(2)	SI-36	床面直上	20.0	7.9	7.2	40	C1	青森県第471集	図112-1	2009
新田(2)	SD-73	堆積土上層	18.0	7.0	6.8	39	C1	青森県第471集	図165-1	2009
新田(2)	表採	—	18.5	6.9	7.6	37	C1	青森県第471集	図197-1	2009
新田(2)	SK-066・069	覆土・下層	20.0	7.0	6.8	35	C1	青森市第107集-3	P2-034-0487	2011

註5：青森県では、古代（平安時代）の遺構堆積土に見られる十和田a火山灰（To-a）と白頭山・苦小牧火山灰（B-Tm）の2枚の広域テフラが確認されている。それぞれの降下年代には諸説あるが、本稿ではTo-aを915年（小口：2003）、B-Tmを940年（早川・小山：1988）と捉えることとする。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1976 『黒石市牡丹平南遺跡・浅瀬石遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第26集
 青森県教育委員会 1984 『和野前山遺跡』青森県埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第8集
 青森県教育委員会 1988 『李平下安原遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第111集
 青森県教育委員会 1991 『中野平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第134集
 青森県教育委員会 1994 『朝日山遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第156集
 青森県教育委員会 1999 『櫛引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第263集
 青森県教育委員会 2005 『高屋敷館遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第393集
 青森県教育委員会 2005 『通目木遺跡・ふくべ(3)遺跡・ふくべ(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第392集
 青森市教育委員会 2001 『野木遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第54集-5
 弘前市教育委員会 2001 『早稻田遺跡・福富遺跡』
 五所川原市教育委員会 2003 『五所川原須恵器窯跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集
 八戸市教育委員会 1989 『田面木平(1)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第34集
 八戸市教育委員会 1991 『田面木遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第41集
 八戸市教育委員会 1991 『風張(1)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集
 岩井浩介 2010 『早稻田遺跡出土資料の再々検討』『青森県考古学』第18号 青森県考古学会
 岩井浩人 2008 『津軽地域における古代土器食膳具の変遷』『青山考古』第24号 青山考古学会
 宇部則保 1989 『青森県における7・8世紀の土師器－馬淵川下流域を中心として』『北海道考古学第25輯』
 宇部則保 2007 『第Ⅱ章東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係』『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部研究成果報告書
 宇部則保 2010 『9・10世紀における青森県周辺の地域性』『古代末期の境界世界』法政大学国際日本学研究所研究成果報告書
 小口雅史 2003 『古代東北の広域テフラをめぐる諸問題－十和田aと白頭山(長白山)を中心に－』『日本律令制の展開』吉川弘文館
 工藤清泰 2005 『津軽平野の様相』古代城柵官衙遺跡検討会
 新山隆男 2011 『青森県内における平安時代の非ロクロ成形壺について』『研究紀要第16号』青森県埋蔵文化財調査センター
 早川由起夫・小山真人 1998 『日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山』『火山』第43巻第5号 日本火山学会
 藤原弘明 2007 『五所川原須恵器の編年と年代観』第2回北日本須恵器生産・流通研究会資料集
 三浦圭介 1995 『古代』『弘前市史 資料編I (考古編)』